



ナガバノイシモチソウ

1、2024年のナガバノイシモチソウ最終報告

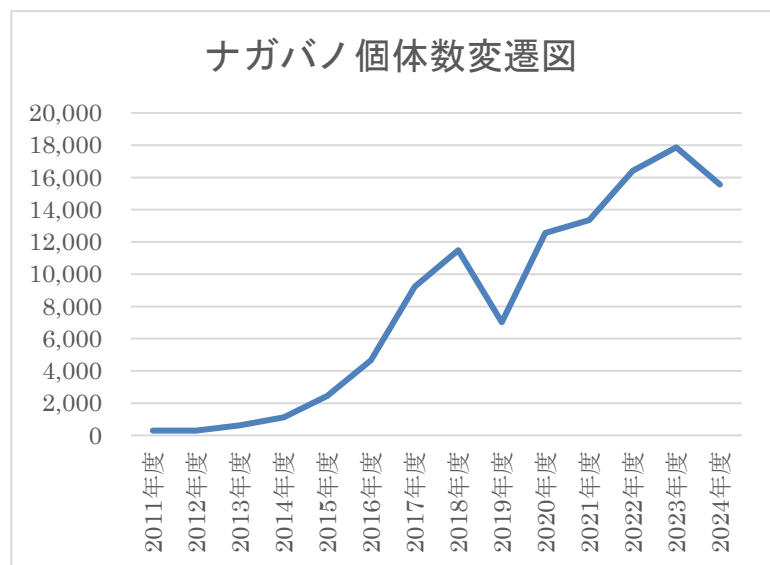
愛知県指定天然記念物「豊橋のナガバノイシモチソウ自生地」では、7月末日頃を基準に自生個体数の計測を20年以上続けています。今シーズンは開花も終わり枯れた状態で種子も地表に散布された状態です。

1) 自生個体数の変化

ナガバノイシモチソウは自生個体数、最高開花数ともに昨年より減少しました。今年の個体数は基準日の7月30日で、**15,550**個体になり、昨年同時期の**17,869**個体の約**0.87倍**になりました。昨年より10%程度減少という状態です。

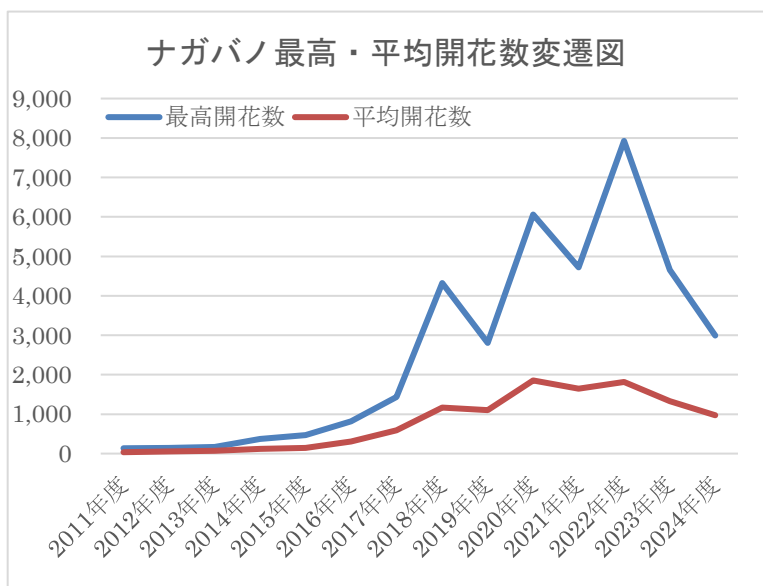
2019年度の個体数の減少は、ヤマイやテンツキを抑えるためにスプリンクラーによる散水量を半減させたことが原因と考えられ、翌年散水量を元に戻したところ、個体数も増加に転じました。

今回の個体数減少は散水量の減少ではなく、7・8月に雨がほとんど降らなかったことが原因と考えられます。7・8月に雨が降らなかった時に、スプリンクラーの水が届かないところではナガバノイシモチソウは枯れてしまい、ほぼ全滅状態でした。



2) 開花数の変化

今年はナガバノイシモチソウの一日の最高開花数が**2,990輪**となり、2023年の**4,656輪**の64%に減りました。平均開花数は**972輪**となり、2023年の**1,818輪**の53%になり半減しました。延べ総開花数は**124,369輪**になり、昨年の**196,323輪**の63%になり大きく減りました。個体数は前年比13%減でしたが、平均・最高開花数は前年と比較すると半数近くまで減少しました。

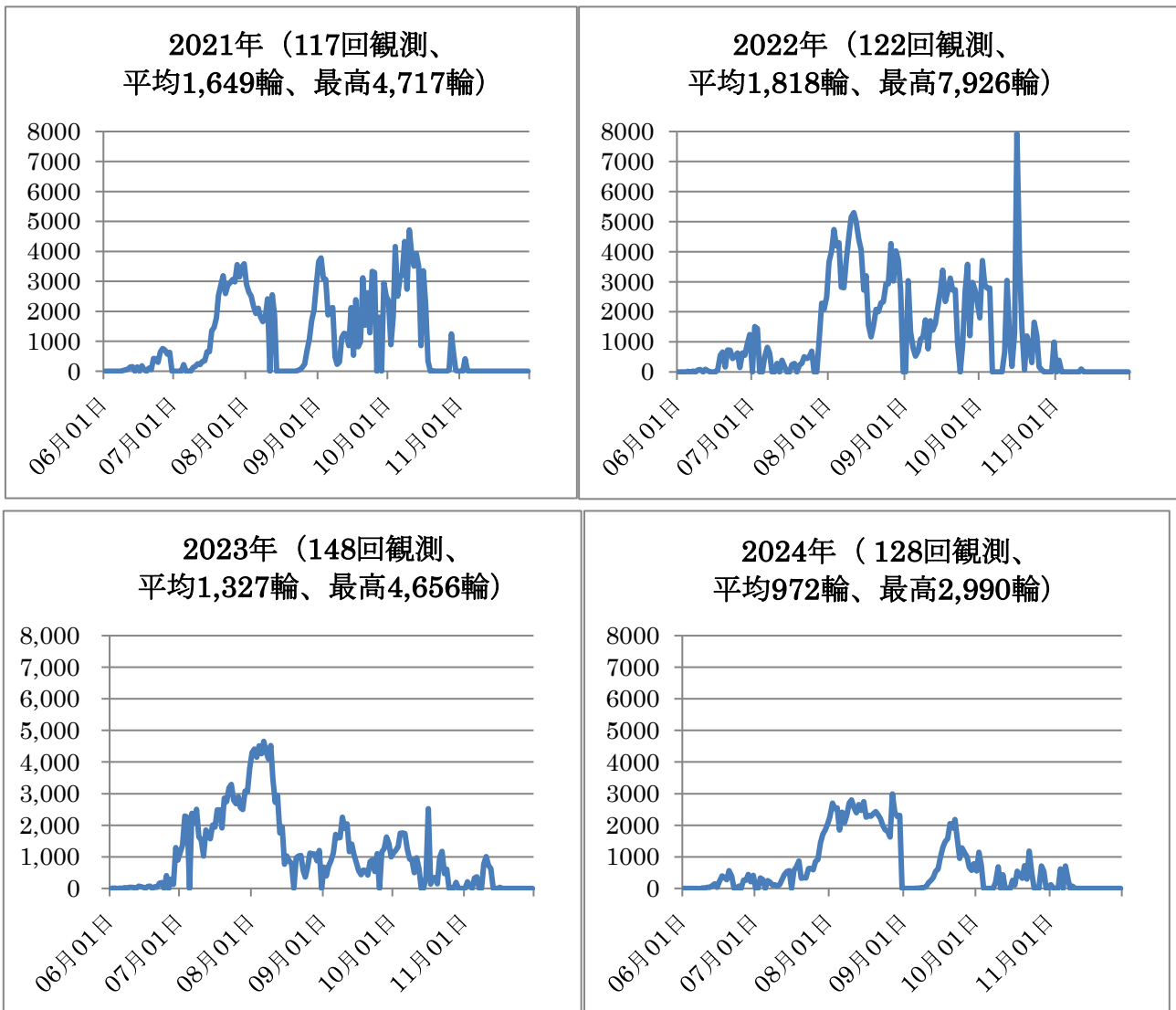


3) 開花のパターン

下の表はナガバノイシモチソウの一日ごとの開花数を示したグラフですが、2021年から今年までの4年間はこれまでとやや異なった状況です。2018～23年までは、最高開花数が隔年で大きく増減しています。これまで最高開花数は10月中旬頃の日だけに見られる特異日に記録されていましたが、2024年はその特異日も観察できませんでした。

全体的な開花傾向としては、8月を中心とした40日間程度は毎日開花数が多く、9月以降増減を繰り返す場合が多いようです。しかし、2018～23年の6年間は規則正しく隔年で増減を繰り返しました。2024年にそのパターンが崩れたのは、7・8月の少雨が原因だったのか、あるいは他に原因があるのかは分かりません。2025・26年にどのようなようになるのか。観察を続けたいと思います。

ナガバノイシモチソウ日別開花数



4) 各地点での状況

今年も第1～7地点で白くなって集中する群落が見られました。次頁上写真は自生地全体の写真で西から東を見たところです。薄い黄緑色で白っぽくなっている部分が、ナガバノイシモチソウが集中しているところです。手前の第1地点から奥の第7地点にかけてすべての地点で集中した群落が見られました。

次頁のナガバノイシモチソウ自生地全体では、手前が第1地点で、中央部に白くなった群落がみられます。中心に直線的に並んでいるのはスプリンクラーで3個並んでいます。

画面奥はやや右側にずれて
3個ほどが見えています。

第2・7地点の写真にも
白く集中したところがあち
こちに見られました。第
3・4地点は開花状況の写
真です。各個体の大きさは
例年と同じですが、花茎の
本数、1本あたりの開花数
は例年より少なくなってい
ました。ヒナノカンザシも
例年通り見られ、トウカイ
コモウセンゴケは自生範囲
の地表面を削らずに残すこ
とによって個体数が増えて
います。



ナガバノイシモチソウ自生地全体（2024年9月1日）



第2地点（西から：2024年8月30日）



第7地点（東から：2024年8月30日）



第3地点開花状況（2024年9月13日）



第4地点開花状況（2024年9月13日）

2、渥美半島のタカの渡り(ケアシノスリの大量飛来?)

葦毛湿原は渥美半島の基部にあり、渥美半島は春と秋にタカの渡りが見られることで有名です。葦毛湿原の上空を何羽ものタカが上昇気流に乗って円を描きながら上昇し、十分上昇すると一直線に渥美半島の先端に向けて飛んでいくのを何回も見たことがあります。

昨年末、2024年12月28日午前10時頃、150羽以上のタカの群れが葦毛湿原の上空を中心に20分ほど旋回している鷹柱が見られたのを葦毛湿原調査員の吉田豊さんが確認しました。タカの群れは2群あり、一つは100羽以上、一つは50羽以上いたそうです。タカの群れは葦毛湿原の上空を中心に20分ほど旋回し、最終的には葦毛湿原南東側の山の向こうに消えて行ったそうです。そこから北東に向かったのか南西に向かったのかは分かりませんが、おそらく南西の渥美半島先端に向かった可能性が高いと思われます。タカの種類は確定できていませんが、ノスリに似ているが羽が細長かったということです。

葦毛湿原調査員の古田雅章さんはケアシノスリではないかという意見で、調べたところ、2008年に北陸から中国地方を中心にケアシノスリが大量飛来している事例がありました(久野公啓『タカの渡り観察マニュアル』2024年9月、文一総合出版、33頁参照)。

ケアシノスリはユーラシア大陸と北米大陸の高緯度地方で繁殖し、中緯度地方で越冬するとされています。日本で確認される個体数は極めて少なく、まれにしか見られない珍鳥で数羽程度が北日本を中心に越冬するとされています。

大量飛来は侵入的渡りと呼ばれるもので、高緯度地方でネズミやノウサギを主な餌とするフクロウ類、タカ類に見られ、これら餌が特に減少した冬は、例年に比べより南方へ大挙して渡るといった現象のことです。

2008年には北陸から中国地方にかけて300~400羽が来たそうで、4月上旬には北に帰るケアシノスリが青森県竜飛崎で47羽確認されています。豊橋市周辺でも隣接する田原市の埋立地1区~4区で10羽近く見られましたが、これ以後の記録は無いようです。

今回、葦毛湿原で確認されたタカの群れがケアシノスリであれば、西日本で越冬した後に再び渥美半島を通して北に帰る可能性があります。竜飛崎での観察例から、北に帰るケアシノスリは1回の大集団で帰るのではなく、数羽から10羽程度の小集団で一定期間内を随時帰っている可能性があります。葦毛湿原でも、3月下旬から4月上旬は北へ帰る個体が観察できる可能性が最も高い時期と思われる。南下と北上で、渡りのルートが異なるかもしれませんが、西日本でもケアシノスリが確認でき、4月の渥美半島で北に帰る群れが確認できれば、12月の大集団がケアシノスリであった可能性が高まると思われます。

現状では、「謎のタカ」ですが、豊橋湿原保護の会、豊橋自然歩道推進協議会、東三河野鳥同好会等と連携して確認したいと考えています。

ケアシノスリ

分布：ユーラシアと北米大陸の高緯度地域で繁殖し、中緯度地域で越冬する。例年、日本には数羽程度が飛来するが北日本に多い傾向がある。越冬期は大規模な干拓地や広い農耕地で見られることが多い。

渡り：渡りが観察されるのはごく少数。移動の時期はノスリとほぼ同様。竜飛崎では比較的多く記録されているが、それでも各シーズンに1羽程度。ただし、カウント調査では、はるか遠方を通過する本種をノスリとして記録している可能性を否定できない。

参考文献：久野公啓『タカの渡り観察マニュアル』2024年9月、文一総合出版